
GTA主人公が幻想入り

Jason

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G T A 主人公が幻想入り

【Nコード】

N 5 2 2 5 Z

【作者名】

J a s o n

【あらすじ】

G T A L C S の主人公であるトニーシプリアーニが幻想入りし、数々の依頼をこなして、様々な事件に遭遇する物語です。G T A なので残酷なシーンが含まれます。

初投稿なので言い回しや文の構成がおかしかったりします。

リバティーシティー アメリカ最悪の街。 アメリカに住むならその名を知らない人はいないだろう。

全体的に治安が悪く、凶悪犯罪が多発しており政治腐敗に麻薬売買、労働組合のストライキ

そして何よりも移民の人種ごとによる犯罪組織の抗争が激しく、それらを踏まえ“全米で最も成功できない都市”に八回も受賞するという不名誉な記録を持つ都市である

またさらにリバティーシティ市警の、必要とあらば軍隊まで動員する過剰防衛の傾向や、悪徳警官の収賄などの不安定な内情もあり、市民の不安は留まるどころを知らず、同都市は「Great place to leave（脱出するのに最適な場所）」などという不名誉な呼び名を与えられている

リバティーシティーの数多くあるマフィアのなかで最も有力である「レオーネファミリー」「シンダコファミリー」「フォレッツリアミリー」のうちレオーネファミリーに属し、下っ端の子飼いであるトニー・シプリアーニは、人生に一度や二度ぐらい「しかない不可解な出来事にひどく困惑していた。

さつきまで車窓から見えた建物が連なる景色から、深い木々が深く生い茂る景色に一変したのである。

公園・・・ではない。だとすれば一体・・・

トニーシプリアーニ

フルネームはアントニオ？シプリアーニ

リバティーシティーでも有力なマフィア「レオーネファミリー」に所属している。

極度のマザコンであり、母親のいうことは何でもする。

また、ファミリーの為ならどんな犯罪でもためらわないでやるが、それさえ除けば一般常識はある様。

ある「大物」を殺して一旦リバティーシティーを離れていたが、ほとぼりが冷めて帰ってきた。

本作の設定ではまだ下っ端扱いのままのチンピラ

性格は気が短く暴力的である。

G T A - 0 0 2 (後書き)

ただの主人公説明です…

リバティーシティーには三つの島がある。

「ポートランド」「ストートン島」「シヨアサイド? ベイル」

そのうちの工場地区のポートランドのセントマークス付近で、レオ
ーネの特徴的な車

レオーネセンチネルを走らせていた。

レッドライト地区を縄張りとしている、シンダコファミリーを一
掃した後だった。レッドライトは今はシンダコのものとなりつつあ
る。

シンダコは前まではレオーネの傘下にいたが、このごろになって激
しく対立し、ここ数日には頻繁に銃声が鳴り響いている。

シンダコだけでなく中華街を拠点とするトライアド、ヒスパニック
系ギャングのディアブロ、リバティーシティーでも最も力のあるレ
オーネ、シンダコと並ぶフォレッツリアミリーにも警戒しなければ
ならない。

いずれにしても、近い内に対立するだろう…

そう思えてきたら腹がすいてきた。

そういえば今日はママのレストランで食事だったな…

ならば車を飛ばさないと トニーはアクセスを踏みこんだ。

万が一遅れたらフライパンで殴られるかもしれない。トニーは苦笑
いを浮かべた。

彼の母親がヒステリーを起こしたらのちのち後が大変である。

センチネルにはどこにいても敵対ギャングに対応できるよう、銃器や手榴弾、火炎瓶、バットまである。あらかじめいつも武器を携帯しなければ、後ろから刺されるか撃たれるか。いずれにしてもこの街では常識である。

レオーネのボス「サルバトーレ」宅近くで車を飛ばし、信号無視をしようとしたとき日本のことわざでよく言う「開いた口はふさがらない」状況に遭遇した。なんと10メートル先に妙な切れ目ができたのだ。

その切れ目がまた不思議で、空間を切り裂いてできてるようだ。明らかにここら一帯では見かけないものである。

その時まで得体の知れないものに気をとられて気がつかなかったが、辺りに鈍い銃声が響いていた。

トニーは辺りを見渡した。するとどうだろう。

焦げ茶色の服に身を包んでる奴ら シンダコの野郎と、レオーネが激しい銃撃戦を繰り広げていた。

シンダコが近くにいます…？

違いねえ あの得体の知れないものは爆弾だ。レオーネのボスを爆殺しようと爆弾を家の近くに置こうとした。だか移動中すぐに見つかってしまったって今に至るのだろう。

しかしあの爆弾はどう処理すればいいんだ？

銃撃戦はレオーネが劣勢である。すぐにカタがつくだろう。

「冗談じゃねえ」

処理の仕方がわからない今、俺はその得体の知れないものを車と一緒に突っ込んで処理するという、自らを巻き込んでボスの安全を確保するという荒業にかけた

そして爆発による衝撃に備え、ハンドルに頭を突きつけ、脳みそはママだけのことでパンクしそうな時、突如それは起こった。

車ごとその切れ目に入っていったのだ。

勿論、トニーはそんなことを知らず頭をハンドルに預けたままその不可思議な空間にセンチネルと共に、紫色の薄気味悪い奥深くに行ってしまった。

その次の日にそれらを一部始終見ていた一般人が、その全てをリバイバー市警に話し、麻薬中毒者による幻覚と判断され、警棒でボコボコにされた挙げ句、署に引っ張られたのは言うまでもない、

GTA-003 (後書き)

改めて見ていたが、文が酷い

まあそれは置いときご感想をお待ちします。

どんな批判でも結構です。

ただ、ここをこうした方がいいとか訂正を言ってくださったらなおさら嬉しいです…

八雲紫は落胆していた。あまりのショックに毎日自分の式を作る朝食に手をつけられなかったほどである。

主人の異変に気がついた八雲紫の式である八雲藍はこの重たい空気を破ろうと原因を聞いてみたが、はっきりとした答えが返って来ない。

ただ重苦しい雰囲気はその場を支配していた…

八雲紫には能力がある。「境界を操る程度の能力」

境界と名の付くものなら何でも支配下におけることができる。いわゆるよくいわれるチート能力である。

また彼女はその能力を使い、外の世界に行くこともしばしば。

事の発端はここから生まれたのである。

外の世界（人間達）はいつ見ても新鮮だ。

身体能力は到底妖怪に勝ち目はないが、彼らは驚くべき頭脳を持つ

ている。
そこから派生し、科学力が進歩、そして今に至る。

紫は外の世界のことはある程度把握している。

だから今度も自ら能力の使い、空間の境界を操り外の世界を鑑賞しようとしてみた。

だが、彼女が“アメリカ最悪の街”にスキマが繋がるとは思ってみなかつた…

リバティーシティーは「全米で最も成功できない都市」といわれている。

また“最も盗難？強盗被害に遭遇しそうな”都市であり、“最も環境汚染による病気で死亡しそうな”都市であり、“最もアルコール？麻薬中毒になりそう”で、何よりも“マフィアの銃撃戦の流れ弾に当たそう”な都市であると認識されている。

スキマからリバティーシティーを覗いた感想は“空気がかなり汚れており”なによりも驚くべきことは、治安の悪さ

街中に響く銃声、それに逃げまとう人々、
交通事故、まさに生き地獄である。

しかしながら紫の目には失望感ではなく、だんだんこの街に対し興味を持つようになった。

彼女が今まで見てきた外の世界は全て治安が良く、平和そのものだった。

それらと連動し、対比することによって、なおさら興味が湧いてきた。

車が通る道路に5?くらいのスキマを開けて、車が目の前にスレスレにくるスリル感を味わうという、子供が喜ぶような遊びをしていたことが間違だった。

遊びが全盛期をむかえた刹那起こった。

焦げ茶色の服を着た男達3名くらいが、紫の近くにいた全身黒づくめの男達にいきなり発砲したのだ。

その場は一変し、銃声が轟く銃撃戦に成り変わる。

さつきまで普通に歩いていた住民達は先を競って逃走し、中には車を乗り捨てる人間もいた。

「嫌な場所に出くわしちゃったわね」

独り言を呟きその場を逃れる為、早々とスキマを閉じようとした。

だが肝心の腕が動かない 拳がらない

おかしいと思いつながら、自分の腕を見て驚愕してしまった。

おびただしい量の血が服を染み込み、細長い腕を伝い、足下に垂れていたのである。

気づいた時は腕に激痛が襲ってきた。多分、今繰り広げられてる銃撃戦に巻き込まれ、流れ弾に当たったのだろう。

咄嗟の出来事だったので、頭がうまく回転しない。でも傷の深さくらい見ておくべきかしら？ スキマの中は暗くわかりにくい。彼女は明るさを求め、スキマを大きく開けた。

瞬間の判断かあるいは咄嗟の出来事に興奮してたのか、スキマを2メートルくらい大幅に広げてしまったのである。

彼女はあわてて縮小しようとした。

だが一台の車が物凄い勢いで此方に向かってくるではないか！
まるで此方に突っ込んでくるように。

結果、紫色の薄気味悪い空間に黒い車が入りこみ、紫の間へと消えていった。

GTA - 004 (後書き)

表現力が
：

これは酷い作品になりそうだ

どうでもいい作者の好きなLCSキャラランキング

1位 トニーシプリアーニ

まあ、好きじゃなかったらこの作品は成立しない

2位 ドナルド？ラブ

え？変態だつて？ いや、キャラ濃くていいジャン

3位 ミッキー？ハムフィスツ

よく見るとイケメン

故意にやったわけではない。しかし、外来人の無駄な幻想入りは時には幻想郷の危機を意味したりする
：

周りの空間に目がついている。おかしい奴だと思われるかもしれないが、ギョロギョロした無数の目に見られると、今の自分の現状を理解しざるを得ない。

人が死ぬところなるのか。 トニーはママとボスのことで、頭も心も支配されていた。

薄気味悪い空間から一変し、辺りは木々が生い茂る南米のジャングルを連想させられる場所にでた。しかしスピードをだしていたので派手に突っ込み、しかも着地地点が岩が露出している足場の悪い場所だったので、お気に入りセンチネルが鈍い音を盛大にだした。

「ガツシャヤヤーン」

俺はフロントガラスに向かって盛大に頭を打ちつけられた。

ひとまず周りを見渡してみる。 歩行者の話し声さえ聞かれない。車のクラクション音やトニーには日常茶飯事の銃撃戦による銃声も聞こえない。 トニーは困惑した。

おいおい、リバティーシティーにこんなでけえ公園あったけ？サルバトーレ宅は確かに少し森林ぽかったけどよ。

トニーは知らなかった。 100メートル先には外来人を主食とする妖怪がいたことを……

妖怪は興奮した。久しぶりの獲物の匂いを嗅げただけで口から涎が垂れそうだ。

弱小妖怪を食べるには攻撃されるリスクを伴う。

だが人間 特に外来人はリスクがない上に実に旨い。

実に柔らかく歯ごたえがあり、こちらの中では人気である。

そのためか匂いを辿って着いた先はもう先を越されて、骨だけというパターンが多い。

彼は待ちきれない興奮を抑え獲物にジリジリ近づいていった。

G T A - 0 0 5 (後 書 き)

短いなあ…

ご感想をお待ちします。アイデア提供でも構いません。基本的にゲームみたいな流れにしたいですね。

G T A - 0 0 6 (前 書 き)

駄文はしょうがない
せめて完結は目指そう

外の人間は弱虫である。これはここの妖怪達の常識である。普通妖怪は人間を食する。ときどき人里を襲うが後に、村で最も信頼される人物「上白沢慧音」に返り討ちにあうだけである。

また村人にも自衛団など弱小ながら、妖怪に対抗する組織があるので、同時に相手をするのは無理がある。

外来人はまた、ここの妖怪達にとって笑いの的である。少なくとも村人達の方が勇気があるといっても過言ではないだろう。

彼らは俺達妖怪を目の当たりにするとき、足が震えそのまま座り込み、弱々しい声や奇声をあげるのである。

逃げることもしなければ反抗さえしないのである。

そのような惨めな姿が人間は妖怪に及ばないことを強く思わせるのだった。

外来人は1ヶ月に一人ぐらいしか来ない。

つまりとても貴重な存在であり、また他の奴らに先を越されるわけにはいかないのである。ついさっき匂いで見つけた獲物を逃すわけにはいかない。また、あの恐怖の顔を見れると思うと、だんだんと疾風の如く獲物に向かっていった。

トニーは車から降り、ピストルを片手にポケットに手榴弾をいれ辺りを見回した。いつも外に出るときは武器を持つ。万が一に備えの用心である。

当然、こんな場所は見覚えはない。もしかしたら、あの意味不明の空間の切れ目はサルバトーレがマリアにプレゼントした植物園の

入り口なのか？ そんなくだらんことを考えたりした。

しかし、空気が綺麗だ。

まるで別世界にいるようだ。

こんな場所じゃオオカミやら熊やら何がでてもおかしくないな。
オオカミ？……

リバティーシティーのマフィア、ギャング達はいつどこで殺されるかわからない。

その為か第五感が鍛えられる。背中に冷や汗が垂れたのと同時に、トニーは横に体を勢いよく投げた。

予想は当たり土煙をあげ、今までいた場所に全身黒色の赤目のデカイオオカミモドキが入れ替わるように着地した。

「おい、何なんだよ」 「冗談じゃない

ここはリバティーシティーだろ？ あんなもんどつからみても怪物かそれとも生物兵器じゃねえか。こんなもんを放し飼いにするとはな…

いくら治安が悪くても、こんなバットジョークはないだろ。 警察は何してやがるんだ。

今まで見たことない未知な相手に脂汗が全身に吹き出す。 ちよつとばかしゃやこしいことになりそうだぜ……

外人だと思っておちよくつてたら油断していた。あの野郎は避けやがった。一年前の奴と同じだ。今度ばかりは今までの獲物とは違うかもしれない。

まあいい 人間風情がどの程度俺様を楽しませてくれるのかな？

彼は驚愕する人間に再度飛びかかった。

G T A - 0 0 6 (後 書 き)

平日は更新が遅れます。

変な切れ目に突っ込むは未開の地にでるわ、オオカミモドキに襲われるし散々だ。

しかもどうもこいつは知能が高いらしく、

「ちえ」や「クソ野郎」等々人間の言語を喋るのだ。殺す気満々である。このままでは俺が屍になるのも時間の問題だ。殺すしかない。

mission : 『妖怪を殺せ』

トニーはポケットから手榴弾をとりだす。一個しかない今有効に使わなくてはならない。あのオオカミ野郎は動きが早い。ならば動きを封じ込めばいい。じゃあ奴の気を引かなければ…

この外来人はこんな事は日常茶飯事かのように、俺様の攻撃を交わす。

俺はいつも通りにいかない狩りに腹が立ち遂に奴に真っ正面から突進した。

これはチャンス トニーはピンを抜き思いつき手榴弾を投げた。オオカミには当たらなかったものの、奴の後ろで、大きな轟音とともに爆発した。

奴は手榴弾自体を知らないせいが大音量に驚き、呆気にとらえ後ろを振り返る。

俺はその無防備に晒しだされた背中に向かって、ピストルで何十発もの弾を打ち込んだ。

血飛沫が舞う。弾丸をまともに受け最初は立ち上がるうと必死にもがいていたか、もう一発頭にお見舞いしてやると無残にその場に倒れ込んだ。

俺様はパニックだった。奴が投げた物が後ろに落ちたと思ったら、大きな轟音をあげ破裂した。あまりの出来事に奴に背中を晒しだしてしまった。

何発もの鈍い重低音が響き、鉛弾を食らい背中から血が吹き出す。

俺は何が何だかわからず倒れた。

mission completed!

改めてこいつを見てみる。明らかにオオカミではない。じゃあ何なんだ一体？

まず、人を探さないと…

『人里へ向かえ』

今日の報酬 1000\$

G T A - 0 0 7 (後書き)

戦闘描写は難しい…

G T A - 0 0 8 (前 書 き)

東方キャラの喋り口調がわからん

道が悪く車がガタガタ音をたてる。何がなんだかわからない。そもそもここはリバッテリーシューターであるかどうかも怪しい。この気味悪い場所から早く抜けないと。

トニーは思いつきりアクセルを踏み込んだ。

木々が生い茂る薄暗い視界から畑と同時に農家なのだろうか？木でできたほったて小屋がポツリポツリと、少数ながら見えてきた。さらに車を飛ばすと人の姿を確認できた。

しかし、何とも妙。こいつらはホームレスより惨めで質素な格好をしている。

トニーは車をさらに加速させ、集落らしき場所へと向かっていった。

妖怪達は仲間の死体の周りに囲むようにして見下ろしていた。背中から首にかけて何かに貫通した跡がある。

「こいつは一年前のあのときと一緒だ。人間の仕業に違いねえ」

「人間風情が…村は皆殺しにしてやる」

「だけどうすんだ？ 上白沢慧音がいる限り俺達に勝ち目なんかねえぞ？」

「そこは心配ねえ ガキの一人や2人を人質にすればお手のもんさ。」

「ぎゃはははは それは名案だな」

「おい何だあれ」 「外人か？」

こいつらは車を知らないのか、こつちを指差して何やら喚いている。 おいおいとんだ田舎に来たみたいだぜ。

あまりにもやかましかったからクラクション音を盛大に鳴らした。
するとどうだろう

泣き叫ぶ者、気絶する者、大混乱に陥った。

俺は車から降り辺りを見回した。

まあ、随分とふざけた村だ。家はボロの一言に尽き、ビルは勿論電柱さえ見つからない。

俺はイラついた。

すると一人の若い女性が此方に向かってくる。はて、このまじめ役か？ならば話が早い。

「おい、ここはどこなんだ？ホームレスをこんなに集めて何やってんだ？」

すると満足した答えは返らず、代わりにふざけた返事が返ってきた。

「その言動を察するにどうやら外人だな。」

「外人？」

「つまり別世界だ。」

GTA・008（後書き）

他の小説に比べ文字数が極端に少ないので、最初から編集し直します。
なので次話は遅れます。

別世界だと…どうやらこいつらは真面目に答えないらしい。

「ここは幻想郷にある人里だ。外の世界と比べ少数規模だな」

「幻想郷って何なんだ」 仕方ねえ。ふざけたジョークに付き合っ
てやる。

「幻想郷とは博麗結界で外界と隔離している。外の人間から忘れら
れた妖怪達を中心に、少数の人間と一緒に共存しているところだな」
「つまり動物愛護団体やらがホームレス生活しているぐらいしか見
えないな」

「どうぶつあいごだんたい？はよくわからないが、信じてはいない
な」

「当たり前だ。おとぎ話にしか見えないぜ」

「ここにくる前に何かに出くわさなかったかな？今までにない経験
とか」

「大きなオオカミにはあつたな」

すると彼女は顔色を変えて焦った声をだした。

「妖怪に襲われた？怪我はないか？」

「こんなことは慣れてる。心配はない。」

「もうじき夜になる。妖怪どもが活発に動く。人里なら比較的安全

だ。こちらに泊まっていきなさい。」

「親切は有り難く受け取るがリバティーシティーにはどう行けばいいのかわせてくれ。」

「だから…」

困った このままじゃ話が一向に進まん。何なんだよ幻想郷って

俺は呆れ空を見上げた。こうなったら何をほざこつが無視してやる。これ以上戯言を聞いてると耳が腐りそうだし。ことわざでいう「聞かぬが仏」である。

腹もすき欠伸をしようとした。何かか此方に向かってくる。また面倒ごとが増えそうだし。

空を飛んで来る…え？空

少女が空を浮いていたのである。

「慧音どうしたんだ〜こんなに集まって」

…なんじゃありゃ 俺は目が飛び出るんじゃないかと思うくらい見開いていた。

「ちょうどいい時に来たな妹紅。 空を浮いているのが証拠だ。嫌でも理解するだろう」

〜少女説明中〜

「そうか大体のことはわかった。そういえば自己紹介がまだ済んでいなかったな。」

俺の名前はトニーシプリアーニ
トニーと呼んでくれ。」

「私は上白沢慧音だ。でこっちは藤原妹紅だ」

「これからもよろしく」

「ああ、こちらこそ。そういえば寢床を貸してほしいんだか…」

「それなら無人の家が有るんだ。悪いがそこで寝泊まりしてくれ」

彼女 慧音から夕食を振る舞われた。純粹にうまかった。味噌汁や米を食べたのは初めだった。俺はひとまずお礼を言い家に向かった。

「うえ、なんだこれ」ボロかった。あつちで住んでいたクソ溜めの方が輝いて見えるくらいだ。しかし親切は丁寧に受け取り家の中を見回した。

『隠れ家を手に入れた』

トニーはその晩ボロボロのベッドに身を委ね今後の事を考えていた。するとドアを叩く音がする。

こんな時間に誰が何の用だ？念の為片手にショットガンを持ち、ドアを開けた。

「今は何も聞かず中に入れてくれ」

いきなり見知らずの胡散臭いジジイが入ってきた。

G T A - 0 0 9 (後 書 き)

G T A L C S の キャラ は 他 に 幻 想 入 り し た 方 が い い か な ？
ご 希 望 が あ り ま し た ら 感 想 の 方 へ

「なんだお前」

俺はいきなり侵入してきたジーサンにショットガンを向けた。
ここが幻想郷じゃなければ撃ち殺しているところである。

銃口が頭を狙う。

「家を間違えているぞ。それが物盗りか？

泥棒だったら容赦しねえぞ。」

「まてまて、落ち着け外来人。確かに勝手に入ったのは悪かった。
だけどなこつちにも色々事情があるんだ。察してくれ。 な？」

俺は中身が飛び出たソファアに座り込んだ。　　じーさんが相対に
おかれた古ぼけたソファアに座り、ポケットから煙草を取り出し、
一服し始めた。

「何しにここに来たんだ？」

すると彼は煙草の煙を口から吐きだし、ゆっくりと口を開き始めた。

「一応忠告しとくぞ。村人にとって外来人とはな印象が悪いんだ。」

印象が悪い？確かに自分は人相は悪いがな…

まてよ…まさか

「幻想郷の成り立ちとして人間は妖怪に食われる存在だったな？」

彼は頷く。

「ならば話は早い。妖怪達はめつたに人里を襲わない。そりゃあ外来人が代わりに食べられるからな。しかしそんな奴がこのやって来たらどうだ。腹を空かした妖怪共がここに襲わりかねない。そういうことか？」

「それも一理ある。」

嫌われることには慣れている。別段気にする必要はない。

「言いたいことはそれだけか？しかしあんたも村人だろ？どうして俺みたいな奴にそんなことを忠告するんだ？」

「一年前ある一人の外来人がやってきたんだ。全身を黒い服で包みこんだ奇妙な奴だった。そいつはリバティシティの何だっけな？レオーネなんとかの下っ端だったとか言っていたような気がする。」

「レオーネ…何だって？」

幻想郷に来てから驚きの連続だ。まさか俺以外のしかも同じファミリーの奴が幻想入りしてたとはい…

「当時の俺は外来人に対し排他的だったんだ。当然のように冷たい目で見てやったよ。陰口なんか普通だったな…でもある日を境にしてそれが逆転した。」

あいつは生活の為に見たことのない植物を他の野菜と一緒に畑で

栽培していたんだ。

その頃の俺は野菜の芽なら何だつて知ってたよ。でも奴が持ってたそれだけは見当すらつかなかった。

その晩俺は興味本位で家に忍び込み、植物の正体を探ろうとした。

奴は栽培した植物をもとに何かを飲んでた。

まあお前らがよく言うヤクってやつだ。

あいつが気持ちよく吸ってるのを見て、俺もやりたいと探求心が強くなったんだ。

スキを伺い少しばかり頂戴した。勿論悪いとは思ってもなかったな。

外来人というレッテルを貼っていたからな。

家に帰り見たまんまあいつの真似をし、初めてヤクを吸ってみたんだ。

するとどうだろう。いままでに経験したことのない快感が体中に行き渡り、人生で最も幸福、今にも空を飛びそうな、もう口では表すことができない幸せにあったんだ。

そこからだった。俺は凄まじく変わり果てた。ヤクがなければ死にそうだ、もう一回あの何とも言えない幸福が味わいたい。

俺はあいつの家に向かい、今までの事を全て話した。盗んだことには腹を立てたらしく勢いよく蹴飛ばされ、思いつきり殴られたが、自分もヤクの栽培を協力する約束で許してくれたんだ。

そのときは嬉しかったよ。毎日ヤクとの毎日だ。俺に幸福の女神が舞い降りたんだ。

村人との交流を拒否し、庭には野菜とともにヤクを混ぜて栽培し

た。

毎年号令の祭りも放棄し、あいつの家に毎日のように向かった。

村人は突然変貌しあいつと仲良くなる俺を差別と偏見の目で見ていた。

しかし外来人のあいつもあの手この手を使い帰っちまった。

お礼として作ってたヤク半分をあげてな。

どうもファミリーに必要な不可欠のものだったらしい。

「今の話でお前さんの過去はわかったが、それが俺に忠告するのとどんな関係があるんだ？」

「いや、村の嫌われ者同士仲良く協力しようじゃないか ん？」

「馬鹿は休み休み言え。俺は明日には帰るつもりだぞ。」

「今は博麗境界は不安定の時期だ。帰るように言っても帰して貰えないだろうな、無駄だ。諦めな。後お前のレオーネファミリーだっけな？結構ヤバイ組織なんだってな。何日間もお留守にしたら？何も言わないで消えた奴がお土産なしにノコノコやって来たらヤバいんじゃないか？」

げ…

「お前が帰る時は手伝ってやるし、ヤクもくれてやる。でもその間は俺の言う通りにしろ。わかったな。夜も遅くなってきたしそろそろ帰る。じゃあな 近い内に顔をだせよ。村人に見つかるらと面

倒だから夜に来い。」

『ヤク中のmissionがつけられるようになった
し夜しかつけられない』

G T A - 0 1 0 (後書き)

感想があると小説を書く意欲が湧きます。
是非お願いします。

トニーは目が覚めた。いつもと違い濁った空気ではなく、澄んだ空気だ。 かけ離れた日常に戸惑いつつも窓を盛大に開ける。

視界の下には村人達がせわがしく働いているのが見える。

彼は顔を洗い、センチネルに運よくあつた携帯食料を朝食代わりに食べた。 レオーネスーツを着こなして外に出た。

俺を見た村人は最初は物珍しそうに見ていたが、仕事が忙しいらしく、籠や農具を担いでサツサと行ってしまった。

俺も慧音に聞きたいことがあつたので、足早に寺子屋に向かっていた。 朝なのか人が多い。 俺が通ろうとすると人波が二手に別れた。 囁き声が絶えない。 実に嫌な気分である。 トニーは元の世界が恋しく思えた。

今日は寺子屋があるので上白沢慧音は書類の整理に追われている。 いつもならばかどるこの作業も今日だけは手が進まなかった。 その原因として昨日来たばかりの外来人トニーシプリアーニが挙げられる。

トニーは一年前に来た外来人に何となく雰囲気似ている。 そのことが彼女を不安にするのに十分だった。 その外来人は何の連絡もなしに突然消えてしまったのである。

妖怪に食べられてしまったのか？ それとももうこの幻想郷にいないのか？

博麗の巫女にも詳しく聞いてみたりもしたが、彼女曰く「最近、元の世界に外来人を帰したことはない。」とのこと。

彼にとって幻想郷は散々だったのかもしれない。ここにくる前に妖怪に襲われ、運悪く左手の指2本を食いちぎられた。

それを踏まえてなのか、この幻想郷に住む妖怪いや、人里に住む村人まで軽蔑し、差別をしていた。よく村人とのいざこざがあり、殴り合いに発展したこともなかったわけではない。

あのととき彼に対して何も協力できなかった、いや、差別発言を連発されてた村人達を構い彼の事まで、頭が回らなかったのだ。彼女は盛大に溜め息をした。

そう考えてる間、ドアを叩く音が聞こえた。深く考えていたせいか、いきなりの訪問にびっくりして声が上ずっていた。

「だっ誰だ？」

「トニーだ。少し困ったことになった。力を貸してくれ。」

慧音は慌ててドアを開けた。

「すまない。実はここで生活していくことで、ある問題が避けられないんだ。」

「家は古いが結構丈夫なんだぞ。何年間も倒壊してない、生活するなら大丈夫だと思うんだか…」

「それはそれで色々ヤバいんだと思うんだが…そんなことはどうでもいい。問題は『服』だ。」

「ああそういえば一着しか持っていないのか。」

「そつだ。最初に来たとき着ていた服しかないんだ。…出来れば外の世界から流れ着いた服や物を売ってる場所はないか？」

村人が着てるあんなボロ雑巾をまとうのはプライドが許さねえ。クソ上司のヴェルチエンゾに見られたらお似合いだと腹を抱えて大笑いするに違いない。

「それなら人里の外れに香霖堂がある。外の世界の道具を扱っている場所だ。そこなら外から流れ着いた服ぐらい売ってるかもしれない。」

「わかった、行ってみる。」

『香霖堂へ向かえ』

G T A - 0 1 1 (後書き)

ミッションインポッシブルは面白い

俺はレオーネ・センチネルを取りに隠れ家のすぐ隣にある小屋に向かった。この小屋は見た目は古いが、ガレージとしての役割を持つには十分な大きさだ。

香霖堂までの道のりはわからないので、慧音が妹紅に案内役を頼んでくれた。人里の外れにあるらしく、歩きでいくには結構きついらしい。無論、俺は空は飛べないから車で行くと伝えておいた。

妹紅がくるまで俺はポケットから煙草を取り出し、車によりかかって一服する。あっちではゆっくりと吸えなかったせいかとても美味く感じる。

「へえ、この黒い塊みたいのが『くるま』ってやつなのか。」

声が出たと思えば後ろを振り向くと、物騒な剣らしきものを担ぎながら妹紅が来た。できればその炎がゴアゴアいつてる剣をしまつてくれないか。

「そう、俺達外の世界の移動手段だ。まあ、飛んで移動するお前達にとっては不便を感じるだろうけどな。」

できれば空を飛びたいさ・・・

「さあ、せま苦しいと思うかもしれないが乗ってくれ。なるべく安全運転は心がける。」

「りょーかい」

「いや・・・そこに座ってもらうと運転ができない・・・」

信号機やら電柱やらサツがないおかげでスピードをバンバンとばせる。こちらにきてからはあっちの常識やらにとらわれなくていい。といってもあの街は常識自体通用しないが。

「こんな黒い塊がこんなに早く動くとは。 外の世界ではこれが普通に普及してるのか？」

「車がなきゃ生きていけないぐらいだぜ。」

車は日常に不可欠だった。そのおかげで車泥棒がウヨウヨいて困ったが。

そついやまだ聞いてなかった。香霖堂の店主はどんな奴なんだろ
う。

「そついえば香霖堂ってどんな奴が経営しているんだ？」

「ノーリんのことか」

「こーりん？」 あだ名か？

「ああ、本名は森近霖之助 妖怪と人間のハーフだよ。」

妖怪と人間のハーフだと・・・もうこの世界に色々ツッコミをいれるのはやめよう。

「店主っていうよりも趣味で物を集めてるからね。コレクターというべきかな。とにかく売り物として出されている物は少ないと思うよ。」

「つまりほしい物がある時は、自分の持ってる物と交換するしかない。」

「そうだね。」

困った、少々クセのある店主だったか。 だめだったら力ずくでも・

「ほら、あの奥にボツンとたっているのが香霖堂だよ。」 俺の考えが一旦中断し、妹紅が指を指した方向に目を向けた。人里から離れているだからだろうか？活気のある声や農地がないせいか、何となく不気味だ。

目を凝らして見るとあっちで見慣れているものが山積みにおかれている。 どうやらここが香霖堂らしい。

俺は車を乱雑におき車から降りた。周りは木や草に囲まれており少し寂しい場所であった。

「トニー何してるんだ？ 早く中に入るぞ」

「悪い悪い」

俺達は香霖堂に入ってしまった。

俺と妹紅は香霖堂に入っっていった。

「いらっしやい。お客さんかい？」 奥から物腰がやわらかそうな声が聞こえた。

てつきり妖怪のハーフだから、角や羽でも生えているかと思いましたが、自分の思っていた人物像と違いひとまず安心だ。

「ああ、外から流れ着いた服や物を貰いにきたんだ。」

「服ならあの棚の上に積んである。気に入ったのがあったら気軽に声をかけてくれ。」

「わかった。」 俺は指定された棚に駆け寄った。 何着もあるなか自分にあつた服を探し始めた。

妹紅も暇なのか一緒に選んでくれる。

「トニー、これなんかどうだ。なかなか似合いそうだぞ。」

「…俺はコスプレ趣味はないんだ。 ましてはニワトリなんかごめん葬る。」

「これなんかどうだ！」

「……」

ひとまず彼女のありがたい協力を受け取り、俺はカジュアルな服を

選んだ。

「これを頼む。」

「ああ、服ならタダでいいよ。」

それは有り難い。

俺は店主にまだ聞きたいことがあったので、懐からピストルを取り出し彼の目の前に置いた。

彼はピストルを見た瞬間、顔をこわばらせたが、攻撃の意志がないとわかると安心して椅子に座った。

「そんな物騒な物を置いてどうしたんだい？」

「これが危険な物だとよくわかったな。」

「『道具の名前と用途がわかる判る程度の能力』それが僕的能力だからね。」

「そうか、なら話は早い。銃器には弾が必要不可欠なことは知ってるな？」

こーりん…いや、霖之助が頷く。

「俺はここ『幻想郷』に色々な事情でしばらく滞在することになるんだ。ここで生活するなら嫌でも妖怪やらに会うかもしれない。

『自分の身は自分で守る』これが俺達のような人種の心構えだ。

だから俺に銃器や弾をあるだけ提供してくれ。お礼といってはなんだから、腕時計を渡す。」

店主は腕組みをして考える。一体何を考えているのか。

「腕時計は持っていて損はないぜ。逆にそんな鉛の弾持ってたつて得することはないさ。」

あまり揺らがない店主にそろそろキレそうになり始めたとき

「わかった、その話のつたよ。ちょっとこっちに来てくれ。」

店主が声を張り上げた。

妹紅を含む俺達は香霖堂の奥の部屋に入っていく。奥になるにつれ危険物が目に入るようになる。銃、チェンソー、AK、ショットガンまでありやがる。

「弾はタダで提供するよ。でも武器を買うならお金を持ってきてくれないか。以外に貴重にしてるからね。」

弾を提供してくれるのか。そいつは有り難い。

「欲しい弾があったら取っていつてくれ。」

一応、ショットガンとマシンガンの分を貰う。今後のことを考えるとピストルだけでは苦労するだろう。

「悪いな。後々お邪魔になるぜ。そしてこれは俺からの礼だ。」

約束の腕時計を渡す。彼は大変気に入ったらしく、目をキラキラ輝かせながら鼻息を荒くしている。

「いつでもいいからまた来てくれ。新しい品物が手に入ったら連絡するよ。」

『隠れ家にカジュアルな服が届いた』

『香霖堂で武器を購入できるようになった』

G T A - 0 1 3 (後書き)

次回は大幅に遅れます。

G T A - 0 1 4 (前書き)

更新が遅れるといったな あれは嘘だ！(コマンダー風)

弾丸の問題は解決した。思ったよりスムーズに解決したな。トニーは自室のポロポロのソファアに腰掛け、一服を楽しんでいた。

もう幻想郷は夏なのだろうか？ 木々が深緑に染まり、壊れそうな窓からはセミの声と共に眩しい日光が入ってくる。さすがにレオ・ネスーツでは夏に着るにはきついで、この前香霖堂で購入した『カジュアルな服』を着用している。この服は見た目がアレだが、何よりも動きやすい。 以外と気に入っている。

俺は夜までどうやって暇潰しをしようか考えていた。あの薬中… じーさんにはあれつきり顔を合わせたことがない。 家に閉じこもっているのだろうか？ 引きこもり？

俺はしばらく有意義な時間を過ごした。 リバティーシティではこんな一時を過ごせなかつたせいかな、時間の流れが緩く感じる。全く、俺みたいな輩には合わないな。 トニーはソファアから立ち上がり、あまり見回ってない人里を探索することにした。

あちらこちらから威勢のいい声が聞こえる。俺の今いる場所は店が乱雑に並んだ場所だ。 野菜や湖で採れた魚を売ってるらしい。 また、屋台、蕎麦屋など飲食店も並んでいる。 ところが人里の中心地か… 丁度いい。 飯はここらで済まそう。 俺は蕎麦屋に興味を持ち、中に入ろうとした。

その時、中から激しい音がしたかと思うと、一人の人相が悪い男が

飛び出てきた。

「どけ、邪魔だ。」

中に入ろうとした俺と飛び出た男が衝突し、一瞬よろけそうになったが、なんとか体勢を立て直した。何なんだあいつ…

すると一人のじいさん…蕎麦屋の店主だろうか？頭に鉢巻きを巻いたおじさんは声を張り上げた。

「大変でえええ、食い逃げだああああ。」

食い逃げだと…

「ああちよつといいか、そのあんちゃん。悪いがあいつを追いかけてくれ。逃げ足が早くてもじゃないが追いつかん。」

野郎…年寄りが走れないことをいい理由に…

トニーはファミリーの為ならどんな犯罪も躊躇わないが、それさえ除けば一般常識はある。

それを踏まえ、ぶつかった謝罪もないも男に怒りを覚えるのには充分すぎだ。

「待ってる、じーさん。野郎をしばいてやる。」

mission：『食い逃げ犯を捕まえて蕎麦屋の店主に引きずりだせ』

俺は男の跡を追った。男は追っ手がいるとは知らなかったんだろ
う。人混みに紛れ込み、近くの路地に逃げこんだ。

物を食った後だったからあまり走ることにはできないらしい。これ
はチャンス。ハアハア肩で息をしている男に近づいた。

「おい、食い逃げ てめえ。ポコポコにされなくなかったら蕎麦屋
に戻って金払いやがれ。」

「なんなんだお前、俺が食い逃げ犯だと？ 笑わせんな。人違いだ
とっとこ俺の前から消え失せろ。」

こいつはシラをきるらしい。

「さっきぶつかった相手だ。これでわかるだろう。」

男は少し考えていたが、アツと声を漏らした。気がついたようで何
よりだ。

「そういえば出口にいて、俺の逃走の邪魔だった奴ッ」

「さあ、どうするか。二択しかねえぞ」

「ハッハ、誰があんな老いぼれになんか金払うかよ。なんだお前
さっきから英雄気取りかよ。笑わせんなバーカ。」

「その減らず口を潰してやる。」

男は頭に向かって殴ってきた。俺は軽々によけ、男の脇腹に蹴り

をいれる。

蹴りを真に受けくぐもった声をあげたが、体勢を取り直し腕を構える。 奴は食った後だ。 腹に一発当てたら伸びるに違いない。

奴は回し蹴りをしようとしたが、俺まで届かず可哀想に失敗で無残に終わる。

この気を逃さす思いつきり腹に下からパンチを食らわせると、男は痛みを抑えきれず、腹を抑えたまま倒れこんだ。

俺は追い討ちとばかりに、狙いやすくなった腹に何発も蹴りをいれた。

「二度とこんなふざけた真似するんじゃないぞ。次はないからな、覚えておけ。」

俺は白目を剥いたゲスの胸倉を掴み、引きずり回しながら蕎麦屋に向かった。

「おお！ あんちゃん 大したもんだ。 いや、感心したね。 お礼として蕎麦をおごつろう。 思う存分食べてくれ。」

「まあ、こっちは慣れてる身だからな。」

「そっぴえば兄ちゃんはこちらでは見ない顔だね。もしかしてこの前来たばかりの外来人かい？」

「そつだ。」

「ほ？そうか まあ、そんなことよりは非善美を楽しんでいく
ね。」

今日の報酬50\$

夏の夜は虫達の憩いなのか、あたらしこちらに虫の音が競うように鳴り響いている。

俺はじーさんの家に出向く為、人里の外れの方にあるなんとも悲しい場所に直行しているところだ。夜に一人でうろろしていたら、怪しい奴に見間違えられる。だから、なるべく人里の住民に気づかれないよう、周囲に気を配りながら向かっている。はたからみればそれこそ不審者かもしれないが…

しばらく進んでいくとポツリと光が灯ってる家が一軒ある。多分、あれが目的の場所だろう。家の裏には一面の大きな畑がずらりと並んでいた。…あそこにヤクを栽培してるのか… まあ、よくバシないもんだ。

俺は広大に広がるそれを目で追いながら、皮が剥がれ落ちているドアを開けた。

じーさんは来客が来たと同時にすぐ俺とわかると、ニヤニヤしながらこっちに近づいてきた。

「おお、来たかトニー。俺はお前が来るのをどんなに待ちわびていたか」

「俺はお前にあっちの世界に帰るときの手伝いをしてもらう代わりに依頼を引き受けるだけだ。決してお前のパシリじゃねえからな。」

「まあまあそんなに固くなるなって。ヤクでも吸って落ち着いたらどうだ。」

「いや、遠慮しとく。」

「そうか、こんなにおいしいのに…」

ヤク中は今までに腐るほど見た。あいつらみたいになるのはゴメンだ。

「それより少し心配事がある。」

「ヤクがきれたか？」

「いや、実はな。俺の畑から野菜を盗むこそ泥がいやがる。前まで気がつかなかったんだが、昨日発覚した。そこでヤクが存在がバレたら…どうなるか想像してみろ。わかつたらとつと奴から奪い返してこい。」

mission: 「奴にバレないよう野菜を取り返せ。」

奴の家は人里の中心地つまり人が集中している場所だ。下手にバレたら村人にリンチされかねない。

俺は見知らず家に生えている木から辺りを必死に伺う。失敗は許されない依頼だ。

幹を掴む手に汗が滲む。 彼は慎重に暗闇に溶け込み目的地に足を運んだ。

馬鹿正直に玄関から入るのは馬鹿がすることだ。 俺は窓から侵入することに決めた。

もちろん、幻想郷に鍵をかけるほどの技術はないはず。 思った通り簡単に侵入を許してくれた。 後は盗むだけだ、野菜は台所にいけばわかるだろう。

トニーは台所らしきところに足を向ける。

おっとこれは違うな。 なんだよ大根の葉っぱかよ、惑わせやがって…

もしや、野菜との区別がつかなかった物は別に保管してるかもしれない。

俺の予想は当たり、探していた物は包丁をしまっただけである場所にあった。

後は帰るだけの簡単だ。 さっきまでびびってた自分がアホらしく思うぜ。

そこで気を抜くのは早かった。 帰ろうと後ろを振り向いた俺の顔と、驚愕の文字を顔に貼り付けたような家主とバツタリ遭遇した。

「……………」

「……………」

「たっ大変だああああ、泥棒だあああ」

いきなり素っ頓狂な声を発した。 しかも泥棒にいわれなくねえ。

俺は奴の記憶を飛ばすためにも即座に頭に渾身の一撃を頭に喰らわせた。

奴はオカマみたいな声をだして伸びてしまった。しかしこのオカマの出した声があまりにも、響いたので外から「あつちから声がしたぞおお」「はやくいけ」等々状況がヤバくなってきた。

窓から外を覗いてみる。するとどうだろう。門の見張りをしていた自衛団やら、それよりなによりトニーが困ったのは白髪のもんぺを着た女の子の存在である。

そう藤原妹紅、妹紅がいるのである。

おいおい、確かあのねーちゃんともない武器持っていた用な気がしたが…

『誰にも気づかれないうちに戻れ』

G T A - 0 1 5 (後 書 き)

実はケータイ投稿なんですよ…

夜は妖怪達が活発に動く時間帯だ。だから私はよく人里を定期的に、村の自衛団と共に見張りをしている。

今日もいつも通りのルートを回っていた。見張りをし、ある程度時間がたったら帰るのが妹紅の毎日の日課だ。だから今日も何事もなく終わると思いき、手元にある武器を仕舞おうとした時、近隣から驚愕に満ちた声が響き渡った。

「大変だああ、泥棒だああ」

泥棒だと しかもこの時間帯に…

妖怪共の警備を村人達で頑張っている中、盗みをするとはいい度胸だ。

妹紅はその不届き者を捕まえる為に、声がした方向へ向かっていった。

トニーは辺りにうろついている自衛団と妹紅の様子を壁にある隙間から覗いていた。

妹紅 彼女はそこらの妖怪じゃ齒が立たないくらい強いらしい。しかも不老不死ときた。妹紅にばったり出会ったら即アウト。ひとまずこの家からでないと帰れん。

俺は付近の様子を伺った。彼女や村人達は、この家だと特定がついてないのか、ひっきりなしに家を訪問をし、犯人を探している。

いずれ此処だと気づくのは時間の問題だ。でもどうやってここを脱出するか？ 玄関から逃げるのはあまりにも危険過ぎる。ならば最初に使った窓から行くしか方法はないな。俺は半分だけらしく開いた窓に足をかけここから脱出しようと試みた。

足を窓の縁にかけたと同時にドアが壊れるんじゃないかと思うくらいに激しくドアを叩く音がする。多分、ここだとやっとわかったらしい。ノロい奴らだ。彼らに見つからない様、俺は早く行動を済ませた。

村人達がドアを壊し、中を見た時には犯人の姿はなく、代わりに頭を強くうたれ気絶した家主が台所に大の字になって、倒れていた。

「まあ、そんなに悲観的になるんじゃない。まだここらにうろついている筈だ。手分けをしよう。」

「わかった。」

妹紅は空を浮かんだ。暗くてよく見えないが、歩きまわるよりは慣れてる。

彼女はじっくり下の様子を観察し始めた。

トニーはこういうことには慣れてるからあまり過度な心配はしなかった。よくＬＣにいた頃、ヤクの取引をサツにバシて皆で逃げ回

った。今となつてはいい思い出だ…

俺は民家の木に交じり草むら越しでチャンスを待っている。カジユアルな服は色がくらいから闇に溶け込める。

人がいないのを確認し、民家の庭の植物に身を潜めながらも順々に進んでいく。

「おい、どこにもいないじゃないか。」

「しぶとい野郎だ。」

近くで声がする。標的が見つからずイライラしてきたに違いない。

人が探す間をくぐり抜け何とか中心地を抜け出した。もう、少しでジジイの家だ。心配事はないだろう。俺は隠す必要性がなくなつた身を晒した。サツがないからへりなんか気にしなくていい。

案外逃げ切れたなあ
等々、安堵感に浸つてる時、突如それは起こつた。

色とりどりの綺麗で美しい弾が近くに被弾し、岩が呆気なく削りとられる。

後ろを振り返えなくても理解した。恐らくあれが弾幕っていうやつだ。弾幕を撃つのは妹紅に違いない。そして今見つかればバレたということだ。

妹紅が近づくと音がする。身近に来たら確実にバレる。

俺は近くのドス暗い森林に走りデカいとは言えない木にのぼる。

下で隠れるよりは安全かもしれない。手に汗がダラダラ流れながらも妹紅の様子見をした。

彼女は地面に着地し手に持つ武器を取り出す。そして少し奥にある巨大という文字が似合うバカデカイ木に近づいていた。

デカイ木は隠れる所は豊富だが、圧倒的存在感だから人目につく。

妹紅もコソ泥がそこに隠れたと思っているはずだろう。

トニーはバレないように足音を慎重に殺し、目的地に向かった。

今日の報酬 200 \$

l i b e r t y c i t y サルバトーレ宅

リバティーシティを牛耳るイタリア系のマフィア『レオーネファミリー』のドンであるサルバトーレ？レオーネは悩み事が絶えない。今日も妻であるマリア（公衆便所）と口喧嘩をし、イライラが頂点に達しそうになったとき電話がけたたましく鳴った。舌打ちをしたい気持ちで何事かと受話器をとる。

「あん、今度はなんだ？もう少し休ませてくれ。」

「え？またシンダコの奴らか。しつこい連中だ。…あゝわかったトニーに連絡しとく。」

受話器を叩きつけるように置く。

トニーか…わしの人生で最も信頼できる人物だ。早いとこファミリの幹部になり、レオーネの片腕になるだろうと推測する。彼のおかげでレオーネはここまで育ててきた。トニーがいなくなったら…やめよう。これ以上ストレスをつくりたくない。

あれこれ考え事をしながらサルバトーレはトニーに電話をかけた。

「トニー、サルだ。少し困ったことになった。また奴らが街を取り返そうと人数をかき集めているらしい。騒ぎが大きくならない内に始末してくれ。」

「……………」

「トニー、聞いているのか？聞いているなら返事くらいくれ。」

「……………」

「トニー？」

「……………」

「オマエノカーチャンデベソ」

「……………」

サルバトーレはこの瞬間、自殺をしたくなった。まさかトニーは逃げたのか？いや、奴に限ってそれはない。今まで嫌な顔なしに淡々と依頼を引き受け、成功してる彼だ。

「ええい。何でわしは不幸だらけなんだ。」

彼は椅子を蹴った。椅子は八つ当たりを真に受け、ぎしぎし音をたてながら倒れた。

トニーは家にも暇なので退屈しのぎに人里をぶらぶら歩いていた。寺子屋近くにさしかかったとき、後ろから声をかけられた。

「おお、トニーじゃないか。どうしたんだ。」 振り返ると妹紅と慧音だった。

「いや、特に用はないけどな。」

「あ、そういえば。」 妹紅が何かを思いだしたように声を発した。

「昨日、泥棒がでてね。みんなで手分けして探したんだけど、結局逃げられちゃったんだよ。」

あらまあ…

「今度捕まえたら弾幕で粉々にしてやる。」

……

「トニーも十分注意してくれ。いつ襲ってくるかわからないからな。」

「慧音が腕組みをしながらウンウン一人で頭を頷く。」

「覚えとくよ。」

盗むはあまりするもんじゃないな。なにより彼女らにバレなくて良かった。

「そつだトニー、寺子屋を見学しないか？」

慧音が突に話題を変えた。

「寺子屋か、あまり性にあわないなあ。」

ガキは嫌いじゃないがかとって好きでもない。

「子供達に顔を知ってもらうにもいい機会になると思うぞ。それに自己紹介を兼ねて、外の世界で何をやっていたか興味がある。」

子供達に向かつて素直に私はマフィアでしたとでも言うのか。
ガキがマフィアって何？って聞かれたら何て答えればいいんだ。

「ああ…見学はまたいつかでいい。ご親切にありがとう。それじゃあさようなら。」

「え？暇つぶしには丁度いいと思うぞ。そんなに遠慮はしなくていい。それとも聞かれたら何か大変になる事とかあるのか？」

やけにだんだん慧音の顔がニコニコ顔になってきた。よくいうあれだ…顔は笑っているが目が笑ってない。すごい威圧感だ。

「いいじゃん、トニー。子供に知ってもらういい機会だよ。」妹紅が後を押す。

しょうがない、もうなるようになれだ。子供に聞かれたら適当にお茶を濁そう。

「わかったわかった。少しだけいる。」

「よし。じゃあそろそろ始まる時間帯になるからそこでしばらく待っていてくれ。」

さて、何て言おう…

寺子屋が始まる時間帯になり、元気よく子供達を通りすがりに慧音に向かって挨拶をした。

「けーねんせいおはよう。」

「ああ、おはよう。」

「せんせい、今日は何するの？」

「ひとまず中に入って」

まあ、随分と賑やかだ。こんな光景は見たことがないから、新鮮味を感じる。LCには大学はあるが小学校はない。多分治安が悪いせいでだろう。

人数が揃ったのだろうか？眼鏡を掛けた慧音が前の教壇に立ち、張りのある声をあげた。

「よし、それじゃあ授業を始める…といつもならいいところだが、今日は見学をしてくれるお客さんがいる。授業を始める前に自己紹介をしてもらう。」

途端さつきまで静まり返っていた教室が、ザワザワした。この様子だと寺子屋を見学する輩は珍しいらしい。慧音が戸口で突っ立ってる俺に目を向けた。

「さあ、トニーこっちに来て自己紹介を」

「ああ」

俺は教壇の上に立ち、周りを見渡す。子供達は俺が外人だといふことは知っているらしく、興味津々といった様子だ。慧音も壁に寄りかかり腕組みしながら、こつちを見ている。俺はひとまず名前から自己紹介に入った。

「皆知ってると思うが、まだきたばかりの外人だ。本名はトニー・シプリアーニ。気軽にトニーと呼んでくれ。まだこつちに来て間もないから、わからない事があつたら宜しく頼む。」

俺は言いたいことだけを言って自己紹介を終えようとした。ところが約一人納得がいかなかったようだ。もちろんメガネ、慧音である。さっきの紹介だけでは足りないと思ったのか、寺子屋の先生はガキ達にこういった。

「さあ、さっきの紹介だけでは物足りなかったと思った人はトニーさんに直接聞くといい。すべての質問に答えてくれるぞ。」

すると前列におとなしく座っていた少女が手を挙げた。馬鹿正直な奴だ。

「トニーさんは外の世界で何をやっていたんですか？」

「色んな人の便利屋みたいなことをやってた。」

「べんりや？」

「依頼する人が困った事に遭遇したとき助けることだ。」

「ふーん」

質問した少女はわかったのかわからなかったのか、微妙な顔をしその場で引き下がった。

「はい、はい」

今度は後ろにいた男のガキが手を挙げる。

「トニーさんは結婚していますか？」

「してない。」

即答だ。

「じゃあちょうどいいじゃん。けーねせんせ」

「よおおーし、質問は時間をとりそうだからもうやめだ。授業にうつるぞ。」

顔をトマトみたいに赤くし、慧音が慌てて俺を教壇から突き落とし、授業を始めだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5225z/>

GTA主人公が幻想入り

2012年1月6日16時48分発行